タイトル

聖夜に、最後のぬくもりを

―それぞれのサンタクローズ―

【あらすじ】

銀行員の大澤鈴夏（４０）は、銀行強盗に入った菅井星（１９）によって、人質となってしまう。

クリスマスの夜に。

銀行の周りに集まってくるパトカーや野次馬たち。

鈴夏は１２年連れ添った恋人に昨年振られ、しかも末期のガンで余命宣告をされた。

菅井は、エリート一家に生まれた落ちこぼれの末っ子で、金を奪うことが目的ではなく、親や兄弟の顔に泥を塗り、自殺して人生を終わらせようとしていた。

人生の終わりが見えてしまった中年女性と人生を終わらせようとする青年の二人が、誰もいない銀行の中で語り合う聖なる夜のお話。

【登場人物表】

大澤鈴夏（４０）	銀行職員
菅井星（１９）	大学生・銀行強盗

SE　何台ものパトカーのサイレン。
連続する急ブレーキ音。

鈴夏「あの、なんで、こんなことするんです？」
菅井「人質は黙ってろ」
鈴夏「今日、何の日か知ってます？」
菅井「うるさい。喋るな」
鈴夏「まさかのクリスマスですよ」
菅井「おい。お前につきつけてんのは、本物の拳銃だぞ」
鈴夏「あ、やっぱり」
菅井「わかったか？黙ってろ」
鈴夏「はい。黙ってます」
菅井「だから喋るなって」
鈴夏「はい。喋りません」
菅井「おまえ、俺のことバカにしてんのか」
鈴夏「だって、怖いんですもん」
菅井「は？」
鈴夏「本物の拳銃、頭につきつけられて、しかもクリスマスなのに」

菅井「うるさい。うるさーい」
鈴夏「はい。ごめんなさい。だまりまーす」
拡声器から男の声（以降、声）「無駄な抵抗は
やめて、出てきなさい」

ＳＥ　たくさんの人の話し声（野次馬）

菅井「（大声で）黙れ。人質殺すぞ」
鈴夏「あのぉ」
菅井「（大声で）コイツは、本物の拳銃だぞ」
鈴夏「あのぉ」
菅井「うるさいな。何だよ」
鈴夏「たぶん、聞こえてないと思いますよ。
ドア、閉まってるし」
菅井「うるさいな。開けたら寒いだろ」
鈴夏「ですよね。私も寒いの苦手で。沖縄な
んです母が。父も鹿児島。ほぼ沖縄です」
菅井「うるさい。喋るなって言ったろ」
鈴夏「はい。すいませーん」
菅井「チッ」

鈴夏「なんか、映画みたい。銀行に強盗入って、ちゃんと銀行員人質にとって」
菅井「…俺は、映画なんてみねぇ」
鈴夏「私も、見なくなりました。去年、恋人にふられてから」
菅井「…」
鈴夏「結婚するって言ったのに…12年も待ったのに（泣き出してしまう）」
菅井「ん？おい。お前、何、泣いてんだよ」
鈴夏「今年のクリスマスに結婚するって約束したのに…私のサンタになってくれるって言ったのに」
菅井「はぁ？」
鈴夏「悔しい。私の時間、返してほしい」
菅井「おい。とりあえず黙れ」
鈴夏「（しゃくりあげるばかり）」
菅井「おい。おいって」
鈴夏「（しゃくりあげながら）はい」
菅井「喋るな。喋るんじゃないぞ」
声「無駄な抵抗はやめて、出てきなさい」

菅井「（大声で）うるせぇ」
鈴夏「あと、もう一個あります」
菅井「おまえ、まだ喋るのかよ」
鈴夏「私、死ぬんです」
菅井「は？」
鈴夏「末期のガンなんです」
菅井「漫画かよ」
鈴夏「漫画じゃないです。リアルです。ノンフィクション。取材くるかな…」
菅井「どうせ、嘘なんだろ」
鈴夏「嘘じゃないでーす。頑張ってもあと半年の命でーす」
菅井「頑張らないと？」
鈴夏「3カ月。良かった。クリスマス祝えて」
菅井「そんなこと言ってる場合か」
鈴夏「結婚はしたかったな。ほんとは、赤ちゃんもほしかった…」
菅井「喋るな」
鈴夏「若い子にはお局扱いされて…でも私、嫌われることはしてないと思うんだよな。

思う。そう信じたい」

菅井「…おつぼねって何？」

鈴夏「シンプルにいうと、嫌われ者です」

菅井「（ふっと笑い）じゃあ、俺と一緒だ」

鈴夏「そんな感じしない。ぜんぜん」

菅井「俺の何を知ってるってんだよ」

鈴夏「私、人を見る目はあるんですよ」

菅井「じゃあ、なんで男に振られるんだ」

鈴夏「男だけはダメ」

菅井「俺も男だけど」

鈴夏「つまり、恋愛対象としての」

菅井「よくわかんね。俺、バカだから」

鈴夏「バカには見えない」

菅井「（吹き出す）バカだから、こんなことするんだろ」

鈴夏「バカは、何もしないで、人の失敗を笑う人のことです」

菅井「バカは、親や兄弟の期待を裏切りつづけた奴のことです」

鈴夏「親の期待かぁ。なかったな。私、三番

目なんです。姉妹の。末っ子。ほんとは男の子がよかったみたい」

菅井「じゃあ失敗作か」

鈴夏「そうみたい」

菅井「俺と一緒だ」

鈴夏「あなたには未来がある」

菅井「どこが？もうおしまいだ」

鈴夏「なんのなんの。まだ若いですもん」

菅井「俺には、もう若さしかねぇよ。それも刑務所の中で終わりだ」

声「無駄な抵抗はやめて、出てきなさい」

菅井「…いいよ。行けよ」

鈴夏「一緒に行きます？」

菅井「いや。俺は、ここで死ぬ」

鈴夏「どうやって？」

菅井「コイツがあるだろ」

鈴夏「拳銃」

菅井「偉大な発明だ。他人も殺せるし、自分だって殺せる」

鈴夏「私を撃って」

菅井「あんたは、どっちにしても死ぬんだろ？」
鈴夏「だから。悔しいんです。最後くらい、
自分で決めたい」
菅井「弾、1発しかねぇんだ」
鈴夏「じゃあ私にして」
菅井「うるさいな」
鈴夏「サンタみたいな人だったんです」
菅井「は？何の話だよ」
鈴夏「私と結婚しようとしてた人。髭がもじ
ゃもじゃで」
菅井「知らねえよ」
鈴夏「秋に、一回り下の子と結婚した人。髭、
触ってるのかな…奥さん」
菅井「そっちは初めて聞いた」
鈴夏「どっち？」
菅井「若いっての」
鈴夏「今年の初もうでで、お願いしたんです
って。若い子と出会いたいって」
菅井「なんで」
鈴夏「だって、若い方が元気な赤ちゃん産め

るでしょ。私は、あの人の隣で、結婚、あの人との結婚、お願いしたのにな。酷いな。あ、おばさんの酷いは気持ち悪いです？」

菅井「人の気持ちなんてさ、顔みりゃわかるだろ？」

鈴夏「え？わかるんですか？」

菅井「俺にはわかったよ」

鈴夏「すごい」

菅井「すごくねぇよ。俺は落ちこぼれだ。この世に、産まれてこなきゃよかったよ」

鈴夏「どうして？そんな才能があるのに」

菅井「なんも持ってねぇよ。そんでこのざまだ」

SE　バチンと大きな音。

室内が消灯され、暖房が消える。

鈴夏「あ、この銀行、18時になると自動で電気が切れるんです」

菅井「あ、そ」

鈴夏「真っ暗になっちゃった」

菅井「俺、暗いの苦手なんだけど」

鈴夏「懐中電灯あります」

SE　鈴夏の立ちあがる音。

遠ざかる足音。

菅井「あ、おい」

鈴夏「逃げませんって。私、人質ですから」

SE　近づいてくる足音。

懐中電灯をつける音。

鈴夏「ほら、明るいでしょ」

菅井「手にもってるの、なんだよ」

鈴夏「あ、コレ。オルゴールです」

SE　オルゴールの音。

クリスマスソング。

菅井「やめろ」

鈴夏「はい」

SE　オルゴールの音、消える。

菅井「俺は、クリスマスが嫌いだ」

鈴夏「私も」

声「無駄な抵抗はやめて、出てきなさい。ご両親が泣いてるぞ」

菅井「親が泣いてる？んなわけないだろ」

鈴夏「サンタさんに会ったことあります？」

菅井「あるよ」

鈴夏「え？すごい」

菅井「ガキの頃、家に来た」

鈴夏「何もらったんです？」

菅井「オヤジの演出だよ。兄貴にだけ、プレゼント渡して帰ってった」

鈴夏「あら」

菅井「…悪い、もう1回、それ、鳴らしてくれないか」

鈴夏「オルゴール？」

菅井「あぁ」

SE　オルゴールの音。

クリスマスソング。

＊以降、小さく流れつづける。

菅井「（しくしくと泣き出す）」

SE　衣擦れの音。

鈴夏が菅井を抱き寄せる。

鈴夏「あ、臭いですか？おばさん臭い？昨日、ちゃんと体洗ってますけど」

菅井「（弱弱しく）離せよ。離せって」

鈴夏「あたためあわないと…きっと、これから寒くなるから」

菅井「怖い…怖いよぉ」

鈴夏「大丈夫、大丈夫」

菅井「死にたくないよぉ」

鈴夏「大丈夫、大丈夫。あ、そうか、私、死ぬんだった」

菅井「こ、怖くないのかよ」

鈴夏「今は、あんまり」

菅井「普通じゃないぜ。あんた」

鈴夏「あ、それ言われたんです。彼氏から。あ、元彼氏ね。最後、別れる時になって、君、普通じゃないよ、って」

菅井「へへへ」

鈴夏「普通、言います？12年付き合って。その間、一度も言わなかったのに。最後の最後になって言うなんてひどい。最低、最悪」

菅井「へへへ」

鈴夏「（菅井をまねて）へへへ」

SE　衣擦れの音。

鈴夏が菅井をさらに抱き寄せる。

鈴夏「臭かったら、言ってください」

菅井「臭くはねぇ」
鈴夏「良かった」
菅井「良くはねぇだろ」
鈴夏「死ぬなんて、もったいないよ」
菅井「（何も答えない）」
鈴夏「死んだらダメ」
菅井「…じゃあ、どうすりゃいいんだよ」
鈴夏「生きるんです。ただ、生きるの」
菅井「クリスマスプレゼント、もうほんとにもらえなくなっちまったな」
鈴夏「そんなことない」
菅井「そんなことあるだろ」
鈴夏「生きてればきっともらえる」
菅井「もらえねぇって」
鈴夏「私は最後のクリスマスに、プレゼントもらえた」
菅井「なんだよ。何もらったんだ」
鈴夏「人のぬくもり」

SE　衣擦れの音。

鈴夏が菅井を抱き寄せる。

鈴夏「あったかい」

菅井「バカか」

SE　オルゴールの音、止まる。

鈴夏「あ、電池切れたかな」

菅井「…やっぱり、死ぬ」

鈴夏「だーめ」

菅井「俺は、やっぱもう無理だ」

鈴夏「無理じゃない」

菅井「誰も、俺を愛しちゃくれない」

鈴夏「大丈夫、大丈夫」

SE　遠くで橇の音。

鈴夏「あれ？橇の音聞こえない？」

菅井「…聞こえねぇよ」

鈴夏「え？聞こえるよ。聞こえる」

菅井「なんだよ。サンタでもくんのか」

鈴夏「来るのかも。何、頼む？」

菅井「なんもいらねぇ」

鈴夏「きっと何でも叶えてくれるから」

菅井「じゃあ、俺は、人に、親に、家族に愛されるる人間になりてぇ」

鈴夏「私は…なんだろう。あれ、何も浮かばないや」

菅井「サンタ、帰っちまうぞ」

鈴夏「私らしい」

菅井「あんた、人質だよな？」

鈴夏「えぇ。私は人質です」

菅井「今は、どっちが人質かわかんねぇな」

鈴夏「ここから、一緒に逃げませんか？」

菅井「どうやって」

鈴夏「サンタに頼んで」

菅井「そうするか」

鈴夏「じゃあ、もうちょっと待ちましょう」

SE　橇の音が近づいてくる。